

聴覚障害の生徒の受講を機会にプレゼンテーションソフトによる授業に完全移行してみて（理科）

宮城県蔵王高等学校

教諭 山口 裕之

1 はじめに

本校は、1学年3クラスの小規模な普通科・単位制高校である。本校に平成16年度、聴覚障害のある生徒が入学した。1年次の必修科目（理科総合B）を担当する者として、この生徒にどのように情報保障をしていくかということを考えた。その結果、今まで言葉（音声）のみで伝えていた重要な説明を、字幕や映像として画面に表示させようと考え、これを機会に授業を完全にプレゼンテーションソフトに移行することにした。

2 筆者自身の背景

蔵王高校に赴任する前は7年ほど知的障害養護学校に在職した。そこで自閉症の生徒への支援として、コミュニケーションを支援する絵カード集の利用、自作ビデオと絵カードによる郵便局のATM利用の学習や調理学習の支援（※）など、視覚的な支援に積極的に取り組んでいた。また、聴覚障害の生徒の卒業式で、式の進行や祝辞の内容をスクリーンに同時上映させる情報保障の取り組みを行った経験もあった。

3 工夫点

授業をプレゼンテーションソフトで行う事例は最近増えているようだが、聴覚障害生徒への情報保障という観点で工夫した点は、字幕の表示である。教師からの発問の内容、重要な説明など今までなら言葉（音声）で伝えていた部分を字幕にしてスクリーンに積極的に表示させるようにした。

4 どうなったか

聴覚障害生徒は年度途中で転校し、効果を十分に把握するには至らなかった。しかし、唯一受験した前期中間考査の結果では、科目ごとにクラス平均と比較すると、理科の成績は十分高い学習成果が得られたと考えられた。

ところで、授業をプレゼンテーション化するきっかけは聴覚障害生徒の存在であったが、その効果は健聴者の生徒にも現れた。以下、健聴者の生徒への授業で気づいたことを記す。

<良い変化>

- ・午後の授業でも眠そうな生徒がいなくなった。
- ・視線がスクリーンに集中するため複雑な図の説明がとてもやりやすくなり、図に関わる部分の理解が確実に向上した。
- ・生徒に背を向ける時間がなくなり、生徒の様子がよく分かる。また、生徒がプリント記入する時間を利用して机間巡視の回数が増えた。
- ・常にパソコンとプロジェクタがあるので、J A V A、G I Fアニメ、動画などマルチメディア素材を気軽に使えるようになった。

<変化しなかったこと>

- ・知識の定着率
授業は楽しいと生徒は言うが、それだけでは頭の中に定着はしないということを痛感した。今年度はそこを改善するために、授業中のちょっとした練習問題を増やし、かつ暗記プリントとそこからの小テストを増やして取り組んでいる。

5 問題点

プレゼンテーションソフトで授業をしてみているつか問題点を感じるが、その中でもっとも重要な問題は、「伝える」ことに比重が置かれすぎることである。授業にはいろいろな側面があり、教師から生徒への伝達もその中の重要な側面である。しかし、それ以外の、生徒が考えたり、体験したり、あるいは記憶したりといった、生徒の能動的な活動の部分は、プレゼンテーションソフトを使うだけではまったく強化されないことに気をつけなければならない。

スクリーンで何を伝えるか、それとともに生徒にどんな体験をさせ、何を考えさせるか。プレゼンテーションソフトを授業で活用する際には、そのことを常に頭に置いて授業計画を作成しなければいけないと感じた。

※下記ウェブサイト参照。また、一部は『自閉症児の教育と支援』（全国知的障害養護学校長会編；東洋館出版社）に収録。

<http://www.isn.ne.jp/~hiro-y/tokushu/>